

日常生活におけるフォーカシング的経験と構造拘束度との関連

著者	上西 裕之
雑誌名	関西大学心理臨床カウンセリンググループ紀要
巻	3
ページ	65-73
発行年	2012-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/8023

日常生活におけるフォーカシング的経験と構造拘束度との関連

関西大学心理臨床カウンセリングルーム 上西 裕之

要約

本研究では日常生活におけるフォーカシング的経験尺度（FES（上西，2011））の構成概念妥当性を確認するために、理論的に関連が想定される構造拘束的体験様式を測定する「構造拘束度」尺度（SSB（高沢ら，2009））との関連を検討した。その結果、SSBの「反復性」および「SSB総合得点」は、FESの「体験の感受」と有意な正の相関を示し、FESの「間がとれている」「体験過程の受容と行動」と有意な負の相関を示した。これらの結果を踏まえ、FESの構成概念を確認すると共に、SSBによって測定される「構造拘束度」は、「体験過程の直接照合」と「象徴化」のプロセスを拘束するのではなく、体験的距離の調節を行う能力を拘束する可能性を考察した。

キーワード：日常生活におけるフォーカシング、構造拘束的体験様式、構成概念妥当性

I. 問題と目的

E.T.Gendlin（1981/1982）によって提唱されたフォーカシングは心理療法としてのみならず、日常生活で生じている心理的現象に由来するものである。近年、このような日常生活における「心の営みとしてのフォーカシング（増井，1990）」を数量的な観点から捉える試みがなされてきた。福盛ら（2003）は、「日常生活におけるフォーカシング的態度」を測定する尺度として「体験過程尊重尺度（Focusing Manner Scale；以下FMS）」を作成している。

FMSは、「体験過程に注意を向けようとする態度」「問題と距離を取る態度」「体験過程を受容し行動する態度」の3因子から構成される尺度であり、様々な心理学的概念との関連が検討されてきた（山崎，2005；中垣，2006；松岡，2006；中垣，2007；河崎，2008；青木，2008；土井ら，2009；宮武，2009）。また、上西（2008，2010a）は、FMSにはフォーカシングの特徴である悩み事などに伴う「からだの感じへ注意を

向ける」といった体験の「身体感覚的側面（吉良，1998）」への注意を尋ねる質問項目は存在するものの、「頭や胸やお腹がモヤモヤした感じがする」といったフェルトセンスを感受していることを具体的に尋ねる質問項目が見当たらないことを指摘し、フェルトセンスの存在を感じていることを示す項目を含めた「体験過程尊重尺度改訂版（The Focusing Manner Scale-Revised；以下FMS-R）」を作成している。FMS-Rは、精神的健康（上西，2008，2010a）、自己肯定意識尺度（上西，2010a）、Alexithymia（上西，2010b）、曖昧さへの態度（上西，2010c）などとの関連を通して構成概念妥当性が検討されてきた。また上西（2010a）では、日常生活におけるフォーカシングの構造をモデル化し、その検討を行なっている。さらに、上西（2011）は日常生活におけるフォーカシングを流動的なプロセスとして捉えるための尺度として「日常生活におけるフォーカシング的経験尺度（Focusing Experiencing Scale；以下FES）」を作成し、日常生活におけるフォーカシングに関す

るモデルを提唱している。

このように日常生活におけるフォーカシングの研究では様々な心理学的概念との関連性の検討やモデルが提案されてきた。

ところで、フォーカシングの背景理論である体験過程理論ではこのような日常生活におけるフォーカシングの流れを阻害するものとして、構造拘束的体験様式が存在する。構造拘束的体験様式は体験過程理論における概念であり、「体験過程の様式が構造から拘束を受けている程度に応じて、体験過程の暗黙の働きが生じにくくな(Gendlin, 1961)」る体験様式である。高沢ら(2009)によれば、構造拘束的体験様式は「過程進行中(In Process)」と対比される概念であり、「情緒の遅延あるいは分離」「現前性のなさ」「細部の新鮮な豊かさの欠如」「反復性」「凍結した全体」「最適の暗黙的作動の欠如」という6つの特徴を持つとされる。また「構造拘束的体験様式」では、「本来は状況やその時々で状況の感じ方は違っているはずなのに、同じような感じ方がなされてしまう(池見ら, 1999)」。換言すれば、構造拘束的状态とは、「『体験過程』が『象徴』との絶えざる相互作用のもとに『自己』の中でいきいきと捉えられている(末武, 2006)」という「過程進行中(In Process)」の状態が拘束され、体験過程の流れをいきいきと体験することが出来ず、概念や行動に柔軟性を欠く、いくつかの堅いパターンに縛られた状態を指す。

近年、このような構造拘束的体験様式の特徴を数量的に測定する尺度として「構造拘束度尺度(Scale for Structure-Bound; 以下SSB)(高沢ら, 2009)」が開発されている。高沢ら(2009)は、「構造拘束的体験様式」の6つの特徴を「即時性」「暗在する複雑性」「反復性」の3つのカテゴリーにまとめ、それらに対応した26項目を作成し、因子分析による検討を行った。その結果、「反復性」と「傍観性」の2因子、13項目を抽出した。また彼らはSSBとGHQ28(Goldberg, 1978; 中川ら, 1985)による「精

神的健康度」およびRevised Hallucination Scale(RHS; Morrisonら, 2000)の日本語訳による「幻覚様体験」との関連を検討した結果、「SSBの総合得点」「反復性」「傍観性」はGHQ28の総合得点およびRHSの総合得点と有意な正の関連があることを見出した。以上のように、体験過程理論において「構造拘束的体験様式」は「体験過程の推進」と対比的な概念であり、端的に言えば体験過程そのものが停滞している状態とも考えられる。そしてSSBによって示される「構造拘束度」は数量的研究からも精神的健康や幻覚様体験との関連が示唆される概念である。

以上を踏まえ、本研究は「日常生活におけるフォーカシング」と「構造拘束度」の関連を検討し、「日常生活におけるフォーカシング」のプロセスを停滞させる要因や促進させる要因についての検討を通して、FESの尺度としての特性や構成概念妥当性を検討するものである。

Ⅱ. 方 法

(1)調査対象

調査対象は、関西圏に在住する大学生178名であった。その平均年齢は、 19.6 ± 1.7 歳、性別では男性77名(平均年齢±標準偏差= 19.6 ± 1.5 歳)、女性は101名(平均年齢±標準偏差= 19.6 ± 1.8 歳)であった。

(2)調査の方法

調査は大学の一般教養の心理学の講義時間中に無記名・自己記入形式の質問紙を用いて実施された。調査期間は2010年6月中旬であった。なお、倫理的配慮として、得られたデータは統計学的な処理により解析されるため個人が特定されることがないことを調査用紙に明記し、調査場面でも口頭にて教示した。

(3)質問紙

a) 日常生活におけるフォーカシング的経験尺度 (FES)

「日常生活におけるフォーカシング的経験」に関する質問項目を検討し、因子分析法を用いて作成された30項目、6因子から構成される質問紙である。なお、評定方法は「全く当てはまらない(1)」～「あてはまる(5)」の5件法を採用した。

b) 構造拘束度尺度 (SSB)

SSBは上述の通り、高沢ら(2009)によって開発された尺度であり、構造拘束的体験様式のうち「反復性」と「傍観性」を測定する2因子、13項目の尺度である。評定方法は高沢ら(2009)に則り、「1. 全く当てはまらない」～「7. 非常に当てはまる」の7件法を用いた。

(4)統計解析

統計解析にはSPSS Ver.18 および AMOS Ver.18を用いた。

Ⅲ. 結 果

(1)FESの探索的因子分析の結果

本研究ではFESの30項目について探索的因子分析を行い、その因子構造を検討した。まずFESの30項目の天井効果およびフロア効果を検討した。その結果、No.7の項目において若干の天井効果が認められたが、内容的には“からだの感じ”についての質問項目であったため高く評定されることが予測される項目であった。そこで本研究では、No.7の項目をこの段階では削除せず、分析に含めることとした。次に30項目について因子数を6に仮定して、主因子法、promax回転による因子分析を行った。その結果、上西(2011)の因子構造と概ね合致する因子構造が得られた。しかし、因子負荷量においては、何れの因子にも.35以上の因子負荷量を示さない項目が1項目、複数の項目に.35以上の因子負荷量を示す項目が2項目、認められた。

そこで、これら3項目を分析対象から除外し、再度因子数を6に仮定した主因子法・promax回転による因子分析を行った。その結果をTable 1に示した。

なお、各因子の α 係数は、「体験の感受」で $\alpha = .81$ 、「体験過程の確認時間・空間の確保」で $\alpha = .83$ 、「体験過程の吟味」で $\alpha = .80$ 、「体験過程の受容と行動」で $\alpha = .75$ 、「間が取れている」では $\alpha = .73$ 、「閃き」では $\alpha = .79$ であった。また、27項目の回転前の全分散に対する説明率は49.3%であった。

(2)SSBの確認的因子分析の結果

本研究では、SSBの因子構造を確認するために確認的因子分析を行った。その結果、SSBの確認的因子分析の適合度は、 $\chi^2(54) = 71.49$, $p = .056$, $GFI = .942$, $AGFI = .903$, $CFI = .985$, $NFI = .944$, $RMSEA = .043$ であり一定の基準に達する結果が得られた。SSBの確認的因子分析の結果、および各因子の α 係数、因子間相関係数をTable 2に示した。

(3)FESとSSBの相関分析

FESとSSBの関連を検討するために、それぞれの下位因子の因子得点を算出し、下位因子間の相関係数を算出した。その結果をTable 3に示した。

SSBの「反復性」は、FESの「体験の感受」($r = .32$, $p < .001$)と正の有意な相関が認められ、「体験過程の受容と行動」($r = -.20$, $p < .001$)、「間が取れている」($r = -.51$, $p < .001$)とは有意な負の相関が認められた。SSBの「傍観性」ではFESのどの下位因子とも有意な相関は認められなかった。また、「SSB総合得点」は「体験の感受」($r = .28$, $p < .001$)と有意な正の相関が認められ、「体験過程の受容と行動」($r = -.20$, $p < .001$)及び「間が取れている」($r = -.44$, $p < .001$)と有意な負の相関が認められた。

Table 1 日常生活におけるフォーカシング的経験尺度の因子分析結果

因子名 (α係数) 項目	因子負荷量						共通性 h ²
	I	II	III	IV	V	VI	
I. 体験の感受 (α = .81)							
3 悩み事があると頭や胸やおなかにモヤモヤとした感じがすることがある。	.80	-.06	.05	.03	.03	-.08	.65
7 思い通りに物事がはかどらないときには、胸やお腹にモヤモヤとした感じがすることがある。	.76	.05	-.10	-.10	.12	.10	.51
48 悩み事があるときには、頭や胸やおなかなどに重たさを感じる。	.66	.09	-.03	-.07	-.19	.03	.53
12 言いたいことがあるが、言葉にしにくい時、からだの内側にモヤモヤとした感じがすることがある。	.59	-.14	.17	.03	.04	-.00	.42
52 自分の気持ちをはっきりしない時は、からだの内側がすっきりとしない感じがする。	.54	.06	.04	.15	-.14	-.01	.44
II. 体験過程の確認時間・空間の確保 (α = .83)							
39 生活の中で自分の気持ちを深く理解するための時間を持っている。	.03	.81	-.09	.16	-.05	.01	.72
23 生活の中で、自分の気持ちを確かめるための時間を自分なりに持っている。	-.02	.77	-.12	.08	-.01	.06	.61
47 生活の中でからだの感じが伝えていることを確かめるための時間がある。	-.11	.69	.24	-.07	.06	-.06	.59
14 自分のからだの内側で感じていることを確かめるための時間や場所を持っている。	.08	.64	.12	-.14	.10	.01	.45
III. 体験過程の吟味 (α = .80)							
20 私は、言いたいことがうまく表現できないときに、からだの感じを確かめることがある。	.01	.11	.71	-.19	-.01	.14	.58
2 言葉を探すときにからだの感じを確かめることがある。	.06	-.23	.71	.11	.02	.03	.53
11 悩み事があるときには、一度立ち止まってからだの感じを確かめてみるがある。	.14	.10	.60	.14	.05	-.23	.49
44 私はからだの感じの意味を吟味することがある。	-.18	.11	.59	.06	-.07	.10	.47
21 私のからだの内側の感じは私にいろいろなことを伝えてくれる。	.09	.11	.57	-.05	-.03	.10	.47
IV. 体験過程の受容と行動 (α = .75)							
1 自分の気持ちに自信を持って発言している。	-.09	-.16	-.03	.62	.01	.13	.38
27 自分の話す言葉は、自分の気持とびったりとしている。	-.15	.12	-.02	.59	-.04	.07	.41
10 自分の気持に正直に行動している。	-.01	-.04	.11	.58	.08	-.06	.38
51 自分の感じていることをこう感じているんだとありのまま受け取っている。	.11	.06	.05	.57	-.06	-.11	.37
19 自分の感じていることを包み隠さずに認めるようにしている。	.12	.09	-.06	.47	-.03	-.05	.26
35 自分の感覚は信頼できると思っている。	.10	.04	-.04	.40	.12	.31	.45
V. 間が取れている (α = .73)							
53 生活の中で気がかりなことがあっても、意識して深く考え込まないようにしている。	.11	-.06	-.03	-.04	.81	.09	.63
29 生活のなかで困難事が出てきたときには、考えすぎないようにしている。	.05	.13	-.13	-.06	.70	-.05	.46
13 悩み事があっても、そのことばかり考えずに生活を送ることが出来る。	-.14	.08	.06	.04	.61	-.09	.44
4 生活の中で気になっている問題があっても、巻き込まれずに日々の日課に集中することが出来る	-.12	-.06	.15	.13	.42	.00	.27
VI. 閃き (α = .79)							
58 突然考えもしなかったアイデアが浮かんでくることがある。	-.02	-.01	.07	-.06	-.02	.85	.71
42 特に考えていたわけでもないのに、突然自分の内側から気になっていたことの新たな面や解決策に気がつくことがある。	-.01	.05	.09	.01	-.08	.73	.62
34 ふとした瞬間に気になっていたことの解決策を思いつくことがある。	.09	-.01	-.04	.20	.09	.54	.45
因子間相関係数							
I	—	.13	.29	.31	-.24	.14	
II		—	.43	.36	.02	.37	
III			—	.44	.07	.43	
IV				—	.17	.49	
V					—	.13	
回転前の全分散に対する説明率 (%)	21.5	10.0	6.2	4.4	4.2	3.0	
回転前の全分散に対する累積説明率 (%)	21.5	31.5	37.7	42.1	46.3	49.3	
主因子法・promax 回転							n=178

Table 2 SSB の確認的因子分析の結果

因子名 質問項目	因子負荷量	
	I	II
反復性 ($\alpha = .92$)		
1 自分の悩みによってがんじがらめになりやすい	.83	
2 一つのことにごだわり、他の面が見えなくなることがよくある	.63	
3 ネガティブな気持ちを引きずりやすい	.84	
5 いったん気になると、いつまでも気になってしまう	.79	
7 いったん悩み出すと考えすぎてどうどうめぐりになってしまう	.87	
9 一つの事柄にとらわれるほうである	.85	
11 最近あった出来事を、いつまでも頭の中でかんがえるほうである	.66	
13 自分の悩みに対していつも同じようなことが頭に浮かぶ	.69	
傍観性 ($\alpha = .67$)		
4 自分のことでも、他人事のように感じる事が多い		.27
6 自分のことでも、傍観者になっていることがある		.23
8 ぼんやりと上の空になりやすい		.66
10 生活が順調にいつているときでも、その気持ちにひたりきれない		.45
12 いろいろな体験をしても、どれも退屈に感じる		.36
因子間相関係数		II
		I
		.44
$\chi^2(54)=71.49, p=.056, GFI=.942, AGFI=.903, CFI=.985, NFI=.944, RMSEA=.043$		

Table 3 日常生活におけるフォーカシング的経験尺度と構造拘束度尺度の相関係数

	体験の感受	体験過程の確認 時間・空間の確保	体験過程の 受容と行動	体験過程の 吟味	閃き	間が 取れている
反復性	.32***	-.10	-.20***	-.00	-.08	-.51***
傍観性	.08	-.12	-.12	.04	.08	-.11
SSB 総合得点	.28***	-.12	-.20***	.01	-.03	-.44***

n=178

IV. 考 察

(1) FES および SSB の因子分析結果

本研究では FES および SSB の因子分析法による因子構造の確認を行った。FES では、探索的因子分析によって上西 (2011) とほぼ同様の因子構造が再現された。しかし、一部の項目では 2 因子に亘り .35 以上の因子負荷を示す項目やいずれの因子にも .35 以上の因子負荷量を示さない項目が認められ、結果的に 3 項目が因子構造から除外された。

SSB では高沢ら (2009) と同様の因子構造により確認的因子分析を行い、一定の適合度と再現性を確保することができた。

このように本研究では FES の再現性を確認するにあたり、先行研究と同様の因子構造が再現されない現象が認められた。この点について、1 つの可能性として因子分析法とサンプル数の問題が考えられる。

本研究では FES、SSB ともデータを得られた対象は 178 名であった。一般に因子分析に必要なとされるサンプル数は質問項目数の約 5 ~ 10 倍とされ、サンプル数により因子構造が変動する

可能性が知られている(市川, 1999; 松尾ら, 2002)。FESは上西(2011)ではより大きなサンプルを用いていることから、本研究の結果はサンプルサイズによる影響が大きいものと考えられよう。またSSBについても、高沢ら(2009)では尺度作成時により大きなサンプル($n=370$)による探索的因子分析やI-T相関分析(項目-全体相関分析)によってその妥当性が確認されている。この点については、今後の研究によってFESの再現性が保証されるサンプル数を検証していく必要があると言えよう。

(2) FES と SSB の相関分析

本研究ではFESの構成概念妥当性及び尺度としての特徴を捉えるために、FESの下位因子とSSBの下位因子および総合得点の相関分析を行った。その結果、FESの「体験の感受」は「反復性」と「SSB総合得点」とに有意な正の相関が認められていた(「反復性」: $r=.32, p<.001$, 「SSB総合得点」: $r=.28, p<.001$)。

「体験の感受」は気がかりや悩み事等がある際にフェルトセンスを感じている程度を示すものである。そのため本研究の結果は日常生活においてフェルトセンスを感じている傾向が強い者ほど、「自分の悩みによってがんじがらめになりやすい」「いったん悩み出すと、考えすぎて堂々巡りになる」等の反復性の体験をしていることを示すものである。大石(1988)は「“からだの感じ”に意識を集中しすぎると、かえって“からだ”のもつ自律的な機能が拘束されてしまう」「(フォーカシングの手続き上)意識的に“からだの感じ”に注意を向けようとするために、逆説的に体験過程の流れを硬化させてしまう側面がある」と指摘している。また高沢ら(2009)は、SSBを構成する「反復性」と「傍観性」の2因子は体験との距離を測定するものであることを示唆している。すなわち「反復性」は体験との距離が近い、あるいは取れていない状態を測定していると考えられる。この点から考えるとフェルトセンスを感じている状態は心理的距

離が近い、あるいは取れていない状態と考えることが出来る。一方、増井(1990)はフェルトセンスには問題について「ああでもない、こうでもない」と迷わす能力、「こうにも感じられる、こうとも感じられる」というバランス能力、「なるほどこうか」と納得を生じさせる説得能力があることを指摘している。このうち迷わす能力は一見、否定的な能力と見えるかもしれない。しかし、増井(1990)は心理療法においては「治療者がフェルトセンスの迷わせる能力を感受し」、それを信頼し「『ああかも知れず、こうかも知れない』と(中略)迷い歩くことにより硬化した心的状態が緩み」、治療過程が推進されることを論じている。そのため、「しっかり迷うことができる能力」が育成されることに治療的意義があることを指摘している。

これらの知見を日常生活におけるフォーカシングにも生じる現象として考え合わせると、フェルトセンスを感じる傾向の強いことは「ああかも知れない、こうかも知れない(増井, 1990)」といった堂々巡りの状態であり、構造拘束状態を高め、体験過程の流れを硬化させるものと考えられる。しかしその一方でフェルトセンスを感じる傾向は、堂々巡りを行うことが出来る能力、即ち「しっかり迷うことができる能力」があると考えることもできる。北川(2002)は「ああでもない、こうでもない」という「思考の円環」にあえて飛び込むことで答えが立ち現れてくることがあり、「思考の円環」にとどまり続けることは「強み」であることを示唆している。このように本研究の結果より「体験の感受」は、自分の思考によりがんじがらめになり構造拘束状態に陥る可能性と、一方で「迷うことの出来る能力」の育成という潜在的可能性を含むものであると考えることが出来る。このように考えると、フェルトセンスを感じることに加えて、迷いながらも体験過程の流れを硬化させずに推進させていく能力がより重要であると考えられる。

次に、FESの「体験過程の受容と行動」は

SSBの「反復性 ($r = -.20, p < .001$)」と「SSB 総合得点 ($r = -.20, p < .001$)」と負の相関を示していた。この結果は体験過程の流れに沿い、自分にぴったりとした発言や行動ができていると感じる状態が「反復性」や「構造拘束度」とは負の相関にあることを示すものである。これは、FES および SSB の現象や理論的関連を考慮すると必然的な結果であると考えられる。「体験過程の受容と行動」では日本語版 GHQ28 による「精神的健康度」とは負の相関¹⁾や「自己肯定意識」とは正の相関が認められている(上西, 2010a)。一方、SSB は GHQ の「精神的健康度」や RHS の「幻覚様体験」との正の相関が認められている(高沢ら, 2009)。これらの点から「体験過程の受容と行動」と SSB の間に負の相関が認められることは、「体験過程の受容と行動」の妥当性を示す結果であると考えられる。

次に「間が取れている」は、「反復性 ($r = -.51, p < .001$)」及び「SSB 総合得点 ($r = -.44, p < .001$)」と負の相関が認められた。「間が取れている」は FMS-R (上西, 2010a) の「間を取る (Clearing a Space)」と「間が取れている (Cleared Space)」の両方の特性を含む因子である。また、FES の「間が取れている」は FMS (福盛ら, 2003) の「体験と距離を取る態度」を参考に「心理的距離」や「間」をより多面的に捉えることを意図したものである。本研究の結果より、体験との距離が近すぎる「反復性」と「間が取れている」が有意な負の相関を示したことは FES の「間が取れている」および SSB の「反復性」の尺度としての妥当性を示すものであると考えられる。

ところで、先述のように高沢ら (2009) は SSB を構成する「反復性」と「傍観性」の 2 因子は体験との距離を測定するものであることを指摘している。吉良 (2002) は、心理的距離が近い場合と遠い場合は一見両極の様に思われるが「実感を感じ難い点については共通し」ており、「近似した体験である」ことを指摘している(吉良, 2002)。本研究の結果で「反復性」と

「傍観性」の因子間相関係数が $r = .44$ と高いことは、吉良 (2002) の知見を支持する結果である。一方、FES の「間が取れている」と SSB の「傍観性」とは相関関係が認められていない。この結果は、FES の「間が取れている」と SSB の「傍観性」では心理的距離の持つ意味が違っているためと考えられる。即ち、FES の「間が取れている」では「意識して深く考え込まない」「悩み事があってもそのことばかり考えずに生活が出来る」など問題や悩みと適切な心理的距離を取ることができている状態を示しているのに対して、SSB の「傍観性」では「自分のことであっても他人事のように感じる」「上の空になることが多い」など問題との心理的距離を不適切に取りすぎている状態を示している。そのため、FES の「間が取れている」と SSB の「傍観性」は同じ距離が取れているといっても、前者は体験過程を促進するための心理的距離を取った心理状態であり、後者はその流れを阻む構造拘束的な心理状態であると考えられる。このように見てみると FES で問題にしてきた心理的距離は、心理的距離が近すぎる場合のみを想定していると言えるかもしれない。そして、「傍観性」と体験過程の距離の問題を考えると、「間を取る」や「間が取れている」と言った一方向性の因子だけでなく、心理的距離が遠い場合を加味し、「心理的距離の調節能力 (吉良, 2002)」に関する因子として包含していく可能性を考察することが出来る。

また、「体験過程の吟味」「体験過程の確認時間・場所の確保」「閃き」は、SSB の「反復性」と「傍観性」のいずれとも有意な相関を示していなかった。この結果は時間や場所を確保し、フェルトセンスの意味を吟味する「体験過程の吟味」や「体験過程の確認時間・場所の確保」、「閃き」を得ることは、「反復性」や「傍観性」とは関連がないことを示すものである。つまり、フェルトンセンスを吟味し、そこからフェルト・シフトを得るといいうわゆる体験過程の直接照合と象徴化プロセスは直接的には「反復性」や

「傍観性」と関連していないことを示唆するものである。しかしながら、SSBの「反復性」や「傍観性」と「体験過程の確認時間・場所の確保」は関連が予測されないにしても、「体験過程の吟味」や「閃き」はSSBの「反復性」や「傍観性」と一見相反する現象であるように思われる。なぜなら、フェルトセンスの意味を問うことや閃くことは、体験過程の直接照合と象徴化の過程において生じていると考えられるためである。従ってこれらの相関関係は、ともすれば負の相関が予測されても不思議でない。ところが、上述のようにFESの「体験過程の吟味」や「閃き」はSSBの「反復性」や「傍観性」とは全く相関関係が認められていなかった。この点をどう考えればいいであろうか。

ここで再度注目したいのは、心理的距離の問題である。即ち、「構造拘束的体験様式」は、「体験過程の吟味」や「閃き」などの体験過程の直接照合と象徴化のプロセスを停止させるのではなく、「構造拘束的体験様式」は心理的距離に影響を与えていること示すものではないだろうか。この点について、吉良(1994)は「クリアリング・ア・スペースが確保できていない場合には、構造拘束的な体験様式に陥る」、逆に「クリアリング・ア・スペースが保持されれば、過程進行中の体験様式が生まれる」と述べている。この指摘から考えれば、構造拘束的体験様式が体験過程の直接照合と象徴化のプロセスを停止させているのではなく、「心理的距離の調節」が不適切な為に構造拘束状態に陥り、その結果、体験過程の直接照合と象徴化のプロセスが停滞すると考えることができる。そのため、FESの「体験過程の吟味」や「閃き」とSSBの「反復性」や「傍観性」の間に、相関関係が認められないのではないだろうか。

このような構造拘束的体験様式と体験過程の関係性については、吉良(2002, 1994)や高沢ら(2009)で指摘されてきたことである。本研究の結果はその知見に数量的分析の観点から裏付けを与えるものと考えられるかもしれない。

れない。

以上の検討により、FESの下位因子の構成概念妥当性の一部を確認することができたと考えられよう。また、FESの因子構造や「間が取れている」などの概念上の発展可能性が示唆されたことは、本研究の意義であったと考えられる。

文 献

- 青木剛(2008)大学生における精神的健康に関する研究-フォーカシング的態度とレジリエンス、自己実現との関連から-, 関西大学大学院 修士論文。
- 土井晶子, 森永康子(2009)大学生における「フォーカシング的態度」と自己効力感, ソーシャル・スキル, Locus of Controlの関連について, 日本教育心理学会総会発表論文集, (51), 83.
- 福盛英明, 森川友子(2003)青年期における「フォーカシング的態度」と精神的健康度との関連-「体験過程尊重尺度」(The Focusing Manner Scale; FMS)作成の試み-, 心理臨床学研究, 20(6), 580-587.
- Gendlin E. T. (1961) Experiencing: A variable in the process of therapeutic change., *American Journal of Psychotherapy*, 15(2), 233-245.
- Gendlin E. T. (1981). *Focusing*, New York, Bantam books. (村山正治, 都留春夫, 村瀬孝雄訳 (1982) フォーカシング, 福村出版.)
- Gendlin E. T., 池見 陽(1999)セラピープロセスの小さな一歩-フォーカシングからの人間理解-, 池見 陽, 村瀬孝雄訳, 金剛出版.
- Goldberg D. P. (1978) *Manual of the General Health Questionnaire*, Windsor, England, NFER Publishing.
- 市川雅教(1999)Q62標本の大きさ, 繁樹算男, 柳井春夫, 森敏昭(編), 心理学セミナーテキストライブラリ=3 Q&A で知る統計データ解析-DOs & DON'Ts-, サイエンス社.
- 河崎俊博(2008)大学生におけるフォーカシング

- 的態度と信頼感, 関西大学, 卒業論文.
- 吉良安之 (1994) 構造拘束的な体験様式へのアプローチ: Clearing a Space の観点から, カウンセリング学科論集, 8, 61-78.
- 吉良安之 (2002) 主体感覚とその賦活, 九州大学出版会
- 北川東子 (2002) シリーズ・哲学エッセンス ハイデガー 存在の謎について考える, NHK 出版.
- 増井武士 (1990) フォーカシングの臨床適用に関する考察-その新しい視点と将来的な課題について-, 人間性心理学研究, 8, 56-65.
- 宮武ゆかり (2009) キャリア意志決定に及ぼす諸要因の研究-社会的要因と個人的要因の関連から-, 関西大学大学院 修士論文.
- 松岡成行 (2006) 体験過程の観点から見た自己愛の傷つき, 千里山文学論集, 75, 117-132
- Morrison A. P., Wells A., Nothard S. (2000) Cognitive factors in predisposition to auditory and visual hallucinations, *British Journal of Clinical Psychology*, 39 (1), 67-78.
- 松尾太加志, 中村知靖 (2002) 誰も教えてくれなかった因子分析-数式が絶対に出てこない因子分析入門-, 北大路書房.
- 中垣美知代 (2006) 体験過程理論と交流分析からみた精神的健康について-体験過程尊重尺度 (FMS) と東大式エゴグラム (TEG) を用いて-, *ヒューマンサイエンス*, (9), 61-66
- 中垣美知代 (2007) 日常生活におけるフォーカシング的態度の研究, 神戸女学院 修士論文.
- 中川泰彬, 大坊郁夫 (1985) 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社.
- 大石英史 (1988) “行為” 次元から見たフォーカシング論-そのモデル化の試み-, 人間性心理学研究, 6, 49-58.
- 末武康弘 (2006) 人格およびその変化をめぐる理論的課題: ロジャーズ派人格理論の推移の検討を中心として, *教育方法学研究*, 7, 137-159.
- 高沢佳司, 伊藤義美 (2009) 構造拘束度尺度の作成および妥当性・信頼性の検討, *心理臨床学研究*, 27 (5), 603-611.
- 上西裕之 (2008) 日常生活におけるフォーカシングの態度の構造, 第 27 回人間性心理学会大会論文集, 135.
- 上西裕之 (2010a) 日常生活におけるフォーカシングの態度の構造についての一考察, *人間性心理学研究*, 21 (1), 69-79.
- 上西裕之 (2010b) 日常生活におけるフォーカシングの態度と Alexithymia 傾向との関連-FMS-R と TAS-20 を用いて, 関西大学心理相談室紀要, (12), 57-64.
- 上西裕之 (2010c) 日常生活におけるフォーカシングの態度と曖昧さへの態度に関連-FMS-R と曖昧さへの態度尺度を用いての検討-, 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 創刊号, 9-20.
- 上西裕之 (2011) 日常生活におけるフォーカシング的経験の構造, 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要, 2, 91-100.
- 山崎暁 (2005) フォーカシングの態度と対処法略との関連, *日本心理学会第 69 会大会発表論文集*, 385.

注

- 1) GHQ による精神的健康度は、得点が低ければ精神的健康が高い傾向にあり、得点が高ければ精神的健康度が低い傾向を示している。そのため、GHQ との負の相関は精神的健康度が高く、正の相関は精神的健康度が低いことを示す。